

ゴールドディング『紙の男』に見る自我と掟

杉村泰教

Self and Law in *The Paper Men* by William Golding

Yasunori SUGIMURA

(昭和63年10月31日受理)

For Wilfred Barclay, novelist, the law of the outer world is always in conflict with his closed self. He confines himself to the imaginary world filled with fantasy and hallucination. He hates his rigid ego being prised open by any external force, whether it is Man or God. Especially, Rick L. Tucker, bogus Professor, is an unbearable persecutor. Impatient to be appointed as Barclay's official biographer, Tucker keeps on prying into the author's private affairs. The more Barclay represses his secret self, the more he feels haunted by a series of its symbols. In other words, a chain of symbols for the repressed fact pursues him in the form of actual persons or objects; Rick Tucker, Halliday and others, a signed contract, as well as his manuscripts tucked in the chest.

On the other hand, he has a hidden wish to expose his whole self to the symbolic world ruled by symbolic order or law. Barclay's soul fluctuates between the rejection and acceptance of this law. His self-contradictory feelings caused by this fluctuation drive the plot of this novel. However, the propriety of the actual law, which is continually persecuting him in this novel, needs to be re-examined.

I

『紙の男』(*The Paper Men*)に登場する作家 Wilfred Barclay と大学の贗教授 Rick L. Tucker は、ともに社会の掟を踏み外して行動する傾向のある人物である。二人は、どちらも相手の弱点を知悉しており、その意味では、ともに相手の非道徳的行為を牽制する「掟」としての役割を果たしている。しかし、両者の自我は、それを認めず、互いに他を排除しようとする。このように、掟は、象徴的なものとして彼らの自我(本能の世界、あるいは想像界)を拘束しているが、彼らは象徴界を拒否して想像界にしがみつこうとする。それはシンボルと事実の区別がない世界、即ち、妄想の世界である。¹

然しながら、彼らの妄想の中には、既に排除した「掟」に服従しようとする傾向が明らかに認められる。「掟」への反抗と服従という互いに矛盾した二つの流れが、この小説のプロットを推進する役割を

果たしているのである。ところで、この「掟」は、果たして妥当なものなのであろうか。

以下の考察は、このような観点の下に行われることになる。

II

Barclayにとって、彼の本能の世界、自我の世界を拘束するのは、妻であり家族であり、とりわけ彼の私生活に探りを入れようとする贗教授 Rick Tucker である。Barclay は、病気の妻を顧みず、娘とも、ろくに顔を合わせたことがない。彼の秘密を探り出そうと家の外のごみ箱を引掻回す Tucker を穴熊と間違えて空気銃で撃ち、傷を負わせたりする。どこまでも執拗に食下る Tucker を、彼はあらゆる手段を講じて排除しようとする。

一方、Tucker のほうも明らかに社会的な枠を越えて、この作家に接近している。Barclay に自分の妻を貸し与えて、この作家の伝記を書く承諾を得よう

ゴールディング『紙の男』に見る自我と掟

としたり、濃霧の中で、Barclay を壊れた手摺へ導き、僅か数フィート下の草地に転落しかけると、そこを絶壁と思わせて救助し、恩を売ろうとしたりする。BarclayもTuckerも、ともに相手の悪事を牽制する意味で、「掟」として作用している。

ここで、この両者の行動を規制している「掟」の性質を考えてみよう。この二人は、ともに相手の行動の自由を奪い、思うままに相手を支配しようとしている。それゆえ、もし彼らが、「掟」として互いに他の行動を規制するとなれば、これは極めて妥当性を欠いた「掟」と言えよう。それは、相手の自由を束縛して快楽を味わうものであったり、相手を必要以上に見下げて優越感に浸るものであったりする。

ところで、彼らは、「掟」を否認する一方、それに従おうとする傾向もある。然るに、「掟」が妥当性を欠く場合、これに従うことは、自己を卑下して盲目的に「掟」の前にひれ伏す以外、方法がない。

「掟」を心から承服するのではなく、無理矢理、自分をその中に閉じこめ、その苦痛によって、ある種の快楽を得ているのである。例えば、Barclay が、あまりにもしつこくつきまとうTuckerに犬の仕種や鳴き真似を強いる場面がある。Barclay は、相手を愛玩犬と見なして楽しもうとしている訳である。一方、Tuckerは、Barclayの飼い犬にされることに憎悪のみならず、ある種の快感を味わっていることは確かである。彼は、自分が本当に犬になったような妄想に陥り、“Yap yap”と鳴きたてる。また、Barclayのほうも、時折、白日夢に襲われ、その中で、彼は体内深く食い入った寄生虫を除去する治療の痛みに苦痛と快感の入りまじった複雑な感情を抱く。

But—and here the patchiness comes in—I got into a nursing home somehow. I’d had a vivid encounter with the red hot worms under my carapace and a nice female doctor got them out of me through various chinks which she demonstrated by showing me a live lobster from the fish market and then again sometimes I think I dreamed the whole thing. Of course, she left the heat inside me but I thought I could put up with that.²

この寄生虫 (“the red hot worms under my carapace”) は、自我の甲羅の下に巣くって魂を蝕み続ける存在である。この虫は、魂の象徴秩序を毀し、象徴的なもの（シニフィアン）に穴をあけて、想像界の領域をますます拡大させてゆくものと考え

られる。Jacques Lacan は、シニフィアンの綻びによるこのような想像界の異常な増大が、妄想を発展させ、ひいては精神病の発現に至ることを指摘している。シニフィアンは、決して単独で存在するものではなく、一貫した連鎖をなしているので、一つのシニフィアンが欠けると「つづれ織り（タピストリー）の緯糸を一本一本抜いていくような連鎖的な崩壊」をもたらす。これが妄想と呼ばれるものである。³

このような閉塞した自我は、いわば“the ego trap”であり、そこにいったん陥るとBarclayのように、死ぬまで出られないこともある。⁴

Barclayの友人Johnnyは、いみじくもBarclayを外骨格 (“exoskeletal”) をもった生物に譬える。

“You see, you are what biologists used to call exoskeletal. Most people are what they called endoskeletal, have their bones inside. But you, my dear, for some reason known only to God, as they say of anonymous bodies, have spent your life inventing a skeleton on the outside. Like crabs and lobsters. That’s terrible, you see, because the worms get inside and... they have the place to themselves. So my advice, seeing you’re going to make me a loan and *noblesse oblige* et cetera, is to get rid of the armour, the exoskeleton, the carapace, before it’s too late.” (p.114)

Barclayにとって、「掟」は、常に、この自我の固い甲羅の外側に存在している。一方、内骨格 (“endoskeletal”) とは、掟が内面化された状態のことである。ところが、彼の妄想の中に現われる女医は、彼の甲羅を外から突き破って、中の寄生虫を駆除しようとしている。甲羅を除去するのではなく、そのままにして、外から「掟」を注入するのである。その痛みに耐えるBarclayは、「掟」を内面化したのではなく、一方的に服従して、自由を奪われた状態に満足しているのである。「掟」は、相変らず外骨格の外にあり、自我と対立したままである。

「掟」をこのように捉え、このような服従の仕方に満足するかぎり、「掟」に反発する傾向と服従する傾向とが、妄想の中でいつまでも対立葛藤し続けることになる。

III

「掟」に反発する傾向は、それを行使する他者の犠牲になることを拒否し、「掟」に従う傾向は、逆

に、他者の享樂の犠牲になることによって、苦痛の中に自らも快樂を追求する。BarclayとTuckerにとって、「掟」は享樂と結びついているのである。これは、神の掟についても同様である。Barclayは、神をも、この享樂の面から眺めている。彼が、寺院の翼廊に足を踏み入れ、キリストの胸像に出くわした時、不意に襲った白昼夢の中で、彼は神に踏みこじられ、破壊され、終には失禁してしまうのである。

It was in the north transept. It faced me across the whole width. It was a solid silver statue of Christ but somehow the silver looked like steel, had that frightening suggestion of blue. It was taller than I am, broad-shouldered and striding forward like an archaic Greek statue. It was crowned and its eyes were rubies or garnets or carbuncles or plain red glass that flared like the heat in my chest. Perhaps it was Christ. Perhaps they had inherited it in these parts and just changed the name and it was Pluto, the god of the Underworld, Hades, striding forward. I stood there with my mouth open and the flesh crawling over my body. I knew in one destroying instant that all my adult life I had believed in God and this knowledge was a vision of God. Fright entered the very marrow of my bones. Surrounded, swamped, confounded, all but destroyed, adrift in the universal intolerance, mouth open, screaming, beppised and beshitten, I knew my maker and I fell down. (p.123)

神の前で糞尿にまみれるという、卑屈でグロテスクな行為の裏に、「神に子供を贈る」という意味が隠されていることは、既にFreudによって指摘されている。Freudの説によれば、これは、神によって去勢を受け、女として孕まされた結果であるという⁵。神の掟は、自他ともに、享樂の「掟」として作用しているのである。同じことは、その後のBarclayの手足の、得体の知れない激痛についても言える。彼は、この痛みを「聖痕」(“stigmata”)と称して、密かに誇りを感じている。

“You will find this difficult to believe but I suffer with the stigmata. Yes. Four of the five wounds of Christ. Four down and one to

go. No. You can't see the wounds, unlike with poor old Padre Pio. But I assure you my hands and feet hurt like hell—or should I say heaven?” “I don't think—” “You don't think people like me should claim such distinctions?” He was looking round in a worried manner as if, I thought, to find a really good shrink to recommend. Perhaps he would give me the name and address of his own. “Come, vicar. Don't you find it remarkable?” “You are serious?” “Otherwise you'll be off again to those publicans and sinners?” “Oh no. Or rather—you are serious?” “I should be! At times they hurt like hell.” He looked closely into my face. “You must be very proud of them.” (pp.187-88)

生理学的にみて、苦痛は、それがいかに長いものと考えられようとも、その終末には快感がある。⁶ Barclayにとって掟の厳しさは、結局のところ快樂と結びつくのである。

Barclayの固い甲羅の下にある魂は、虫が食い進むにつれて、ますます想像界を増大させる。それは既に、その一部が象徴化されて草稿となり、彼の貴重品箱の中に隠されている。彼を取巻く人物たちは、揃って、この想像界の象徴化を求めて甲羅を突破し、彼の魂の中に侵入を図る。この意味で、彼らはすべて掟を行使する他者である。掟は、Barclayの想像界をことごとく象徴化しようとするが、彼は、この象徴化を必死に妨げようとする。即ち、彼の魂のシニフィアンをなんとかして抑圧しようとするのである。

ところが、シニフィアンは、いくら抑圧されても無限に連鎖を形成して復原する性質がある。⁷ 例えばBarclayの伝記を書く承諾のサインを求めてTuckerが持ち歩く契約書は、拒絶されるたびごとに姿、形を変えて、どこまでもBarclayを追いかける。この契約書は、Barclayが覆い隠している魂を隅々まで象徴界の中にさらすものである。つまり、この紙きれは、彼が必死で隠蔽している心の内奥のシニフィアンなのである。追跡は、最初、Tuckerがレストランのメニューの上にさりげなくサインを求めるところに始まり、彼の妻Mary Louの身体と引き換えに契約書の署名をそそのかしたり、自ら犬の芸当まで演じて署名を嘆願することまで発展する。しかし、Tuckerが、いかなる策を弄しても、Barclayはサ

インを拒み、終には、“You’re not going to write that particular biography. I’m going to write it myself—” (p.182) と断言する。このことばに、Tucker は逆上し、仲裁に入った人間まで巻きこんで、ホテルの中で大乱闘となる。契約書の件は、これで完全に小説の舞台から姿を消したかに思われたが、シニフィアンは、またしてもBarclayを捕獲する。それは、彼が書き溜めてあった膨大な量の手記や草稿である。シニフィアンを永久に抑圧するためには、これらの書類をすべて焼却する必要がある。川縁に積み上げられた書類の山は、目下、タイプライターを打っている草稿（この小説）が完成すれば、灯油をかけて燃やすつもりである。この草稿だけは、Tucker への同情の気持もあって、最後に彼に手渡されることになっている。ここで、Barclay は、拒絶したシニフィアンに再び拘束されているのである。既に発狂した Tucker は、Barclay を対岸から狙撃するので、この草稿は、狂った Tucker の手には渡らないかもしれないが、今度は、河原に積み上げられた書類の山が、公衆の面前にさらされる危険性がある。いずれにしても、Barclay は、シニフィアンから解放されることはない。

IV

最後に、Barclay の内面生活を規制する掟について若干の考察を加えてみたい。甲羅の比喻でも明らかかなように、彼にとって掟はいつも外側から押しつけられるものであり、内面化されるものではない。彼が掟に従う場合、それは、あまりにも卑屈であったり、自虐的であったり、不自然であったりする。掟は、一度も心から承服されたことがない。Barclay が生来、無法者の作家であるという事実は認めるとしても、彼をしつこく追跡する Tucker と、その妻 Mary Lou、その背後で糸を引く Halliday 等に代表される秘密結社のメンバーは、Barclay を迫害することによって生き甲斐を感じている人物ではなかろうか。彼らに従っている「掟」は、いわば享楽の「掟」ではないのか。このような「掟」にBarclay が服従する時、彼もまた、自他ともに、いかなる苦痛もすべて享楽の手段とする人物になるだろう。彼にとって、神の掟すら、享楽の「掟」の延長上にあることは、既に述べたとおりである。⁸

一方、彼がこのような「掟」に反発するとすれば、これと正反対の「掟」、例えば、Kant の「無上命令」(“Kategorischer Imperativ”)における「自他一切において、人間を常に等しく目的として取扱い、

決して単に手段として取扱われようとして行動せよ。」のような別の掟に従わざるをえないであろう。⁹

しかし、いずれの掟も、彼を外側から命令の形で拘束することになり得ない。ここに再び、彼の“carapace”が関係してくるのである。¹⁰ 前者の掟に従えば、甲羅から中身をさらけ出さねばならず、後者の掟に従えば、甲羅は一層固く閉じられるであろう。前者の場合は、象徴界に参加するので、妄想からは解放されるかもしれないが、果てしなく悪に発展する可能性があり、後者の場合は、善に向かうかもしれないが、想像界に閉じ籠って妄想に陥る危険性がある。

彼が妄想から解放され、しかも善に向かう道があるとすれば、それは“carapace”の除去であり、内部に掟を自ら作り上げることであろう。彼の友人 Johnny のことばを借りれば、「内骨格をもった動物」に変身することである。

注

1 「掟」とは、要するに象徴化のことである。Jacques Lacan によれば、「掟」は、初めからそこにあるものであり、起源などを問うことはできない。象徴化、即ち「掟」こそが、人間において第一義的な役割を果たしているという。人間の「性」も、「掟」を通して実現されざるを得ないのである。ジャック・ラカン『精神病(上)』、小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳（東京：岩波書店、1987）、P.137 参照。一方、想像界とは、感覚、情動、概念など種々雑多なものが、とめどもない連続継起となつてつぎつぎと重なり合い、積み重なり、あふれ出てくる場所である。そこでは、人は、自分自身の内的心象から距離をとれなくなる。Anika Lemaire, *Jacques Lacan*, trans. David Macey (London: Routledge & Kegan Paul, 1982), pp.60-61. なお、邦訳として、A. ルメール『ジャック・ラカン入門』、長岡興樹訳（東京：誠信書房、1983）、pp.90-92 参照。ラカンによれば、この想像的なものは、それを象徴的連鎖に関係づけられない限り、事実上、何も言うことができない。想像的なものが言表可能なものとなるのは、意味する連鎖のなかにつながれる限りにおいてである。ジャン＝ミシェル・パルミエ『ラカン—象徴的なものと想像的なもの—』、岸田秀訳（東京：青土社、1988）、pp.54-55 参照。

2 William Golding, *The Paper Men* (London: Faber and Faber, 1984), pp.117-18. 同書は、すべてこの版により、引用文のあとにはページのみ記す。

3 ラカン『精神病(下)』p.78, 及び同書(上巻) p.145 参照。

4 G. V. Raj, "William Golding's *The Paper Men*: Dialectics of Desacralization," in *William Golding: An Indian Response*, ed. Satyanarain Singh, Adapa Ramakrishna Rao, Taqi Ali Mirza (New Delhi: Arnold-Heinemann, 1987), p.130.

5 Sigmund Freud, "From the History of an Infantile Neurosis" in *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol. XVII*, trans. James Strachey (London: Hogarth Press, 1981), p.83.

6 Jacques Lacan, *Écrits* (Paris: Éditions du Seuil, 1966), p. 774. 邦訳『エクリIII』佐々木孝次・海老原英彦・芦原 眷 共訳(東京: 弘文堂, 1984), p.269 参照。

7 「抑圧」について、ラカンは次のように語る。抑圧とは、象徴的連鎖の水準では何かうまくいかない場合に起こる。言い換えれば、掟に堪えられないという場合である。このようにして行為やディスクールや行動によって抑圧が行なわれる。それでもなお、象徴的連鎖が底流に流れ続け、要求し続け、その債権を主張し続ける。これは、神経症の症状を介して続けられる。抑圧が、神経症の領域に属するといわれるのは、このような点なのである。(傍点

筆者) ラカン『精神病(上)』, p.138 参照。

8 Goldingは、しばしば、神の掟が享樂と結びついて、残酷な面を見せる場面を描く。S. J. Boydによれば、Barclayの会った神は、悪の化身であり、"cruel, sadistic devil"である。S. J. Boyd, *The Novels of William Golding* (Sussex: Harvester, New York: St. Martin's Press, 1988), 191-95. また、Don Cromptonは、Barclayには、キリスト教的価値観の倒錯、即ち、"Evil be thou my good." があるという。Don Crompton, *A View from the Spire: William Golding's Later Novels* (Oxford: Basil Blackwell, 1985), pp. 160-61.

9 ラカンによれば、Kantが「掟のための掟」という彼の主意主義を通用させたのは、キリスト教が人間を「神」の享樂の面にほとんど目を向けないよう教育をしてきた結果である。*Écrits* pp.772-73. 邦訳『エクリIII』p.267 参照。

10 James Gindinは、"crab" や "lobster" のような甲殻類のイメージが、*Pincher Martin* など Goldingの他の作品にも一貫して見出されることを指摘している。James Gindin, *William Golding* (London: Macmillan, 1988), p.86. この種のイメージは、Goldingの思想の展開に重要な役割を果たしていると思われる。